

本多弘之

*honada hiroyuki*

# 宗教心と根本言

8



「根本言」としての「南無阿弥陀仏」によって、一切衆生の無明からの目覚めを呼びかけている願心、すなわち衆生の存在の根底にある願心（本願）を感受させ、先回述べた「法執」の根の深いことを自覚させ、自力の無効を導きだそうとすることが、親鸞の「悲歎述懐」などの表現の深い意図ではないか、と思う。

その本願の意図を、根本言の内なる構造を解明する形として、いわゆる「名義積」（名号の内面構造を解明する作業）がなされてい

る。言葉の内部に「如来と自己」との分位を与え、いわば「Ich-und-Du」を内部にはらむ言葉として、自己の妄執を対治する道理を解明しようというのである。

そもそも、南無阿弥陀仏という言葉の構造には、「我・汝」と分節できることがある。というよりも、もともと衆生が如来に対して、礼拝しようとする意欲することが「帰命」（ナム）なのであり、その帰命の対象が阿弥陀如来なのである。だから、名号は基本的に、自分が如来に南無します、という意味をもった

言葉なのである。

その分位において、二つの項が問題として現れてくる。「自己」と「如来」ということである。普通の状態なら、「自己」は表面に問いとしては現れない。意識の対象となる「如来」のみが問題となる。しかし、宗教が問題になる意識、すなわち宗教的要求が意識される場合、その要求の満足を、いかにして可能にするかが求道の問いとなる。そのとき、対象を仰ぐ自己そのものが、意識上に問題として浮かび上がるのである。

仏道一般の求道心（菩提心）の場合は、自己の意識に起こる煩惱の対治が主たる関心であり、その煩惱の根源に我執や法執が見いだされ、その対治に集中するから、今、ここで考察している根本言の課題は直接には関係しないとも言える。しかし、唯識の学匠であった天親（世親）に、『無量寿経優婆提舍願生偈』（『浄土論』）がある。この論の構造には、普通に考えようとしても、なかなか了解したいことがある。その謎に取り組んだのが、親鸞であった。

唯識の求道の課題は転識得智であるから、迷妄の意識を教言に照らしつつ内観していき、妄念の本質たる無明煩惱を自覚的に払い去って、意識を清浄にして、智慧を獲得しようとするのである。その転識得智の方法にとって、『浄土論』とはいかなる意味をもっていいのか。阿弥陀如来の本願力を要求することは、自己の転識得智とどのような関係になるのか。そういう問題も、もちろんあるが、それにもまして、『論』の構成そのものが、よくわからないのである。

『論』は偈とその解釈（長行とか解義分と呼ばれる）からなっている。その全体が「無量寿経の優婆提舍」という名で表されている。この天親菩薩の『論』の意図を『無量寿経』の内容たる「本願」に照らしながら丁寧に説明されたのが、曇鸞の『無量寿経優婆提

舍願生偈註』すなわち『浄土論註』である。親鸞はこの曇鸞の仕事で、自己の思索の内容に取り込んでいっている。それが、『教行信証』の柱たる「往相回向・還相回向」である。それに気づくについては和讃で、「天親菩薩のみことをも 鸞師ときのべたまわずは 他力広大威徳の 心行いかでかさたらまし」と述べている。『浄土論註』の教示なしには、論主天親の広大な意図は了解できなかった、と。まさに親鸞がぶつかった謎が、天親の『浄土論』の謎なのである。

菩薩道を歩む菩提心が、十地の過程を次々に克服していくとき、七地には乗り越えがたい難関があると、天親の『浄土論』が見ていることに、曇鸞が気づいて、その「七地沈空」を超えるために「不虛作住持功德」が開かれていると、解釈しているのである。すなわち、菩薩道の成就のために、天親は『無量寿経』によらざるを得なかったということである。

もちろん、そのヒントは解義分の莊嚴功德の展開のなかに、「不虛作住持功德」があり、そこに付されている論主自身の注釈（その他の功德には一切、解釈が加えられていない）があることである。そこに未証浄心の菩薩と浄心の菩薩を分けるのが七地であることが出ていて、この不虛作功德がその関門を突破させることが言われている（東本願寺出版『真

宗聖典』二八五頁所引参照）。

大乘菩薩道の經典である『華嚴経』と、浄土の經典である『無量寿経』との間にも、深い関わりのあることが指摘されているが、菩薩道の課題としての自利利他で、特に「利他」の課題が問われるとき、有限なる人間存在の自己中心性が抜きがたい限界として、強く課題化されてくるのである。『華嚴経』の「普賢菩薩」の名もこの課題から出てくるのだと思われる。『浄土論』の解義分でも、「自身に貪着するを遠離する」とか「自身を供養し恭敬する心を遠離する」というように、自己関心の克服が繰り返し確認されている。

その課題に応答するのが、『無量寿経』の物語であり、法蔵菩薩の名で呼びかけている本願の意味なのである。親鸞は、法蔵菩薩の生ずる由来を「一如より発起する」と表現するが、存在の本来性たる「如」それ自体が、人間にとっての目的であると同時に、衆生は本来そこから出来しているのだということだが、仏法の存在了解なのだ、ということである。

（続）  
（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）